様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５８１

研究課題名（和文）日本語と中国語の結果複合動詞の分析：「視点」と「主観性/主体性」の観点から

研究課題名（英文）Analysis of Resultative Verbal Compounds in Japanese and Chinese with emphasis on Viewpoint and Subjectivity in both Languages

研究代表者
下地　早智子（Shimoji, Sachiko）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：７０３１５７３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：2019年度は、日本語と中国語についてお互いの言語を学習する日中両言語話者の作文から誤用例を収集して分析した結果をまとめ、中国語においてRVCから派生した「心理動詞+“死”」の項解釈の多様性に関する分析を行った。2020年度と2021年度は日本語と中国語の受動文の意味特徴として様々な角度から論じられてきた「被害・迷惑」の意味分析を行なった。中国語のRVCは、受動文や「把」構文と呼ばれるある種の使役構文、非対格構文など、様々なヴォイス現象に直接関わっている。最終年度は、時間認識に関わる副詞および時空間メタファーの分析から「視点」と事態把握に関する日中対照研究を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、日本語と中国語におけるRVCをめぐる従来の議論について、認知言語学における「視点」と「主観性/主体性」の観点からそれぞれの現象を再解釈し、両言語の認知類型論的な位置づけの一端を明らかにしたことである。従来の研究では、日中のRVCに関して、語彙概念構造、生成語彙意味論やコンストラクション形態論、認知フレーム等の理論によって記述・検討されてきた。日本語学から中国語を見た場合は、複合される動詞の組み合わせのパターンに関心が傾くが、本研究では内外の中国語学の成果を積極的に参照し、日本語学と中国語学の双方の問題意識から現象を分析することによって、バランスの取れた対照研究を行なった。

研究成果の概要（英文）：In the fiscal year 2019, we collected and analyzed misuses from compositions written by Japanese and Chinese speakers who were learning each other's languages. The results included an analysis of the diversity of interpretations of the "psych verb + si 'die'" construction in Chinese, which is derived from RVCs. From 2020 to 2021, we conducted an analysis of the semantic features of passive sentences in Japanese and Chinese, specifically focusing on the meanings of 'harm' and 'annoyance'. The RVC in Chinese is directly involved in various voice phenomena, including passive sentences, a certain causative construction called the 'ba' construction, and non-accusative constructions.In the final year, we conducted a comparative study between Japanese and Chinese on the topics of 'perspective' and situation comprehension, based on the analysis of adverbs related to time perception and space to time metaphor.

研究分野：中国語学

キーワード：結果複合動詞　視点　主観性／主体性　ヴォイス　時間　事態把握

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

結果複合動詞(Resultative verbal compound/ Resultative construction、以下、RVC と略称)については、英語学をはじめ、日本語学と中国語学など、それぞれの個別言語研究や日英、日中、英中対照言語学において優れた研究が蓄積されてきた。ただ、それぞれの言語研究において問題の焦点とされてきた現象には異同があり、日本語学においては、前項動詞と後項動詞の組み合わせの制約、中国語学では項解釈の多様性が中心的な課題となることが多い。

まず、日本語については、「他動性調和の原則」(「外項を持つ動詞どうしか、持たない動詞どうしの組み合わせしか許されない」影山太郎 1993.『文法と語形成』,ひつじ書房)や、「主語一致の原則」(由本陽子 1996.「語形成と語彙概念構造」『言語と文化の諸相』,英宝社、松本 1998)などが提案されており、最近では陳・松本 2018(陳奕廷・松本曜 2018. 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系』, ひつじ書房.)によるコンストラクション形態論による、可能な形成パターンの記述が試みられている。例えば、「他動性調和の原則」は、次の(1a)が許されるのに対して(1b)が許されないことを説明することができるが、(1c)が許されないことが例外となる。「主語一致の原則」は(1)のすべてを説明するが「*見向かう」「*聞き帰る」などを過剰生成する。(陳・松本 2018)

(1)　a.　打ち壊す(他動詞＋他動詞)、舞い落ちる(非対格自動詞＋非対格自動詞)

b. *打ち壊れる(他動詞＋非対格自動詞) 、*駆け落ちる(非能格自動詞＋非対格自動詞)

c. *仰ぎ煽る(他動詞＋他動詞) 、踊り狂う(非能格自動詞＋非対格自動詞)

(松本曜 1998. 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114.)

中国語の RVC にも前項動詞と後項動詞の組み合わせの制約は存在するが、以上のいずれの制約も中国語には当てはまらない。

一方、中国語学の RVC 研究においては、項の解釈パターンの多様性に議論が集中している。例えば、(2)には論理的可能性として 4 種類(a~d)、実際には 3 種類(abd)の項解釈が可能である。

(2)　*Taotao zhui-lei-le Youyou le*

Taotao chase-tired-ASP *Youyou* LE

a.　Taotao chased Youyou and as a result Youyou got tired.

b.　Taotao chased Youyou and as a result Taotao got tired.

c. *Youyou chased Taotao and as a result Taotao got tired.

d.　Youyou chased Taotao and as a result Youyou got tired.

(Li, Yafei.1995. The Thematic Hierarchy and Causativity. *Natural Language & Linguistic Theory* Vol.13, No.2.)

いくつの項解釈が存在するかは、前後それぞれの動詞の組み合わせ、及び、RVC と名詞の組み合わせによって異なる。また、中国語の RVC は、受動文や「把」構文と呼ばれるある種の使役構文、非対格構文など、様々なヴォイス現象に直接関わっており、どのような組み合わせの RVC がいずれの構文を形成するかに関しても議論が集中してきた。これは、中国語の動詞がアスペクトタイプのうちの「状態」「動作」「変化」しか持たず、「達成」の空所を埋めるために RVC が形成されること(Tai, James H-Y. 1984 Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories, *Papers from the Parasessions on Lexical Semantics*, Chicago Linguistic Society)と関連している。管見の限りでは、日本語の RVC 研究において、動詞複合後の項解釈の多様性や、ヴォイス構文形成の可否が、RVC との関連から問題にされることはほとんどないようである。

中国語の RVC に「他動性調和の原則」が当てはまらない理由の一つとして、中国語で変化の局面を持つ動詞類の多くが自他同形であることが挙げられる。

(3)　　a. 消防队 灭 火 (消防隊が火を消す)

　　b.　火 灭 了　(火が消えた)

(4)　　a. 我 操-碎了 心 (私は心を心配し砕く)

　　b.　我的心 操-碎 了 (私の心が心配し砕けた)

(3)(4)に対応する日本語の「主体動作・客体変化動詞」(金水敏 2000. 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 2000.『日本語の文法 2　時・否定と取り立て』,岩波書店.)は、自他の対を有することが知られている。すなわち、中国語の RVC は、動詞のアスペクトタイプ分類とヴォイス現象の接点となる形式であるが、日本語の有対動詞のように同一事象の異なる局面を形式で区別しない。

本課題では、日本語における「他動性調和」「主語一致」や変化動詞の有対性について、主として、認知言語学における概念化者の「視座」の一貫性の観点から分析する。また、中国語における RVC の項解釈の多様性や、ヴォイス構文との相関性を、項の語順の問題として捉え、概念化者による「注視点」の時間的推移の観点から分析する。「視座」とは、事態を解釈する観察者の立ち位置、すなわち「どこから見ているか」の「どこ」を指し、ラネカーの視点構図や「主体性」と密接に関連する概念である。「注視点」とは、観察者が「どこを見ているか」の「どこ」を指し、空間移動表現(「車が走っている」)が視点の移動のみの状況(「山の稜線がなだらかに走っている」)に援用されるタイプの「主観性」と関連する概念である。認知言語学では、"subjectivity" を、Lyons, J. や Traugott, E. 等による「主観性」と、Langacker, Ronald W.による「主体性」に区別する。両者は相関しており、議論の整理にはなお難点があるが、「主観性」とは、概ね、言語表現に話し手の解釈が反映する度合いを指し、「主体性」とは、概ね、事態を解釈する側とされる側の対立の度合いを指すものとされる。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本語と中国語における RVC をめぐる従来の議論について、認知言語学における「視点」と「主観性/主体性」の観点からそれぞれの現象を再解釈し、両言語の認知類型論的な位置づけを明らかにすることである。

本研究の学術的独自性と創造性は、以下の 2 点である。

1. 日本語学から中国語を見た場合は、複合される動詞の組み合わせのパターンに関心が傾くが、本研究では内外の中国語学の成果を積極的に参照し、日本語学と中国語学の双方の問題意識から現象を分析することによって、バランスの取れた対照研究を目指す点。
2. 日本語と中国語の RVC に関して、それぞれ、語彙概念構造、生成語彙意味論やコンストラクション形態論、認知フレーム等の理論によって、緻密に記述・検討されてきた現象について、従来とは異なる、「視点」と「主観性/主体性」の観点からの分析を試みる点。

３．研究の方法

1. 動詞の組み合わせのあり得るパターンという観点からの日中対照研究

この課題は、従来両言語において緻密な研究の蓄積があるので、それらの先行研究を、本研究の観点から適切に整理することが中心的な作業となる。影山 1993 は、日本語の複合語を、語彙的複合語と、統語的複合語に分類しているが、本課題では分析対象を前者に絞る。また、語彙的複合動詞の中でも、RVC タイプのみに分析対象を限定し、よりシンプルな突き合わせを行うことを目指す。この段階における対照研究は、語形成のレベルにおける分析になる。

2. 中国語の RVC をめぐる構文現象の整理と日本語との対照

上記 1.の課題とは逆に、中国語の RVC をめぐるヴォイス構文現象に関する先行研究を整理する。主たる分析対象は、項解釈の多様性、非対格構文、受動文、「把」構文となる。後者 3 つの構文は、いずれも述語に RVC を要求する点で相関関係を持ち、構文ネットワークを形成する。この段階における対照研究は、文法論、及び談話のレベルにおける分析となる。

3. 以上の結果に対する「視点」と「主観性/主体性」の観点による分析

1 の段階における形態論レベルの現象と、2 の段階における文法論及び談話レベルの現象について、「視点」と「主観性/主体性」の観点から分析し、両言語における RVC の認知類型論的な特徴を明らかにする。

４．研究成果

2019 度の実績は、以下の 2 点である。

第一に、中国語において、RVC から派生した「心理動詞+“死”」(死ぬほど 嬉しい/楽しい/悲しい etc.)の項解釈の多様性に関する分析を行い、同形式が「主観性/主体性」の点で、極めて興味深い特徴を見せることについて、研究論文を発表した。「心理動詞+“死”」(死ぬほど 嬉しい/楽しい/悲しい etc.)の項解釈の多様性に関する分析では、同現象が人称と関わっており、さらに、同構文の成立と文末助詞“了”（いわゆる“了 $_2$”）が密接に関わっていることを明らかにした。これは、通常の RVC がアスペクト助詞“了”と親和性が高い状況と対照的である。この論文では、文末助詞“了”が Langacker の“grounding element”の一つである可能性を指摘し、RVC の前項動詞が心理動詞となる場合の項解釈の多様性が「視点」と「主観性/主体性」の観点から説明可能であることを示した。

第二に、本課題の準備段階に当たる課題「他動性に対する「視点」の作用に関する日中対照研究：認知意味論に基づいた誤用分析」(平成 28 年度～30 年度基盤研究 C、課題番号：16K02692)において作成した、双方の言語を学習する日中両言語話者の作文から誤用例を収集して分析した結果をまとめた。中国語を学習する日本語母語話者と日本語を学習する中国語母語話者の目標言語での作文に見られる RVC とヴォイスに関する誤用分析では、前者に関しては 49,854 字の作文コーパスを作成し、後者に関しては于康氏より 6,014,321 字のデータから動詞のエラーを抽出したデータの提供を受けた。日本語母語話者に最も多い誤用は、RVC のいずれかの動詞を欠く例であり、中国語母語話者に最も多い誤用は、自動詞と他動詞の混乱である。この発表では、変化事象を「原因-結果」のスキーマを用いて事象の外の視座から分析的に把握するのに対し、日本語母語話者は、事象の中の視座から体験的に把握することが、以上の誤用と関係していることを主張する。ただ、日本語母語話者の誤用は、日中両語の動詞のアスペクト分類に関わるものであり、認知言語学的な解釈がどこまで関与しているかについては、慎重に検討していかなければならない。

2020 年度の実績は、まず、昨年度の二点目の分析結果について、“Transitivity and Morphological Voice in Japanese and Chinese from the Perspective of Cognitive ‘Viewpoints’”という題目で、the 32nd North American Conference on Chinese Linguistics (NACCL-32)において口頭発表を行なった（査読あり、2020 年 9 月）。また、上記の分析結果から、日本語と中国語の受動文の意味特徴として様々な角度から論じられてきた「被害・迷惑」の意味分析に示唆を得ることができた。

2021 年度の実績は、日本語と中国語の受動文の意味特徴として、さまざまな観点から論じられてきた「被害・迷惑」について、当課題の観点から意味分析をまとめ、第 52 回中日理論言語学研究会で研究発表を行った。発表題目は、「ヴォイスのレベルと日中受動構文における「被害」の意味―「受動者への感情移入」か「変化結果の強調」か―」である。Voice は、語彙 (殺す/死

ぬ)、形態論(開ける/開く)、文法論(食べさせる/食べられる)の 3 レベルに分けられ、語彙の対立を欠く動詞は形態論レベルから、形態論的対立を欠く動詞は文法論レベルから形式を借りて Voice 体系の空所を補充 (suppletion)する。すなわち、文法論レベルの受身文の形式が自動詞に援用されることがあり、この場合の受身文は被害・迷惑の意味を持たない。中国語では、内容語である結果補語が形態論レベルの Voice 転換の機能をも担っており、被害の意味が生じるレベルや機構が日本語と異なる。中国語の RVC は、受動文や「把」構文と呼ばれるある種の使役構文、非対格構文など、様々なヴォイス現象に直接関わっており、どのような組み合わせの RVC がいずれの構文を形成するかに関しても議論が集中してきた。しかしながら、語彙、形態論、文法論のいずれのレベルにおいて被害の意味が生じるのかについて日中に違いがあることはこれまでに検討されたことがない。

2022 年度は、主として「視点」と「主観性・主体性」と時間認識に関する考察をまとめ、3 本の研究発表を行なった。これらの研究は、当課題における中国語の RVC における「視点」の関わりを解明するための基礎研究に位置付けられるものである。1 本目は、中国語において「もともと」(originally)を意味する 2 種類の副詞、“本来"と“原来"にどのような使い分けがあるかを分析したもので(“*Benlai* (本来)” and “*yuanlai* (原来)”: A Case Study of the Theory on KNOWLEDGE [知識] vs. EXPERIENCE [体験] in Chinese、国際中国語言語学会、香港中文大学)、前者が知識レベルの命題的事態、後者が実際の時間軸上における体験レベルの出来事に関わることを明らかにした。RVC に働く外からの「視点」は、後者のレベルに属する可能性がある。

2 本目は、松江崇氏と共同研究で中国語の時間詞における“前/後”系表現と“上/下”系表現の対立について考察したもので(「直進する時間・循環する時間: “前/后”“上/下”の時間指示用法における認知的対立」、第 56 回中日理論言語学研究会)、“前/後”系は観察者の空間移動体験に基づくメタファーが働いているのに対し、“上/下”系は観察者が移動事象を外から眺めていることを主張した。後者のような時間表現の存在は、中国語に働く「視点」の大きな特徴であると言える。

3 本目は、これまでの研究のうち、特に「視点」とコミュニケーション行動に関わる内容についてまとめたものである（「日本語と中国語：認知とコミュニケーション」、京都外国語大学大学院公開講演会）。

2023 年度は、中国語と日本語における「視点」と「主観性・主体性」と時間認識に関するこれまでの考察をまとめ、学会における口頭での講演一本と論文を一本発表した。 学会における口頭での講演では、時間指示（時間詞、テンス・アスペクト標識）において、語彙や項目の選択に見られる日中の相違を確認し、その背後には、対象を指示するための参照点の取り方の相違が一貫して働いていることを指摘した。

論文では、ともに既然の事態をマークするように見える“了”と“的”が、双方ともに動詞の直後に置かれる場合と文末に置かれる場合において、並行的に情報の取り扱い方に関係していることを指摘した。すなわち、“了”と“的”が動詞の直後に置かれる場合、前者は動作そのものの実現を新情報としてマークするが、後者は動作そのものを旧情報として背景化しその付帯状況に際立ちを与えるものである。一方、“了”と“的”が文末に置かれる場合、前者は対話の現場に新規の命題情報を位置付けるものであり後者は命題情報を既定（新規ではなく）の確定的な情報として位置付けるものである。文末の“的”は日本語の「のだ」文に相当するとされるが、前者は基本的に焦点構文であり、後者は広くモダリティやメタ言語的用法を発達させていることから、双方の機能は必ずしも対応していない。形式的には対応する両者の機能上の差異は、中国語が情報構造を、日本語が話し手の主観を、文法により色濃く反映させる言語であることを示している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 下地早智子	４．巻 70
２．論文標題 On the Conceptual Structure of "Psych-Verb + si(死)" Compounds and "le2(了2)"	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神戸外大論叢	６．最初と最後の頁 39-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 下地早智子
２．発表標題 “Benlai (本来)”and “yuanlai (原来)”: A Case Study of the Theory on KNOWLEDGE[知識] vs. EXPERIENCE[体験] in Chinese
３．学会等名 The 28th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 下地早智子、松江崇
２．発表標題 直進する時間・循環する時間：“前／后”“上／下”の時間指示用法における認知的対立
３．学会等名 第56回中日理論言語学研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 下地早智子
２．発表標題 日本語と中国語：認知とコミュニケーション
３．学会等名 京都外国語大学大学院公開講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 下地早智子
２．発表標題 ヴォイスのレベルと日中受動構文における「被害」の意味――「受動者への感情移入」か「変化結果の強調」か
３．学会等名 第52回中日理論言語学研究会シンポジウム『漢語と諸言語の比較』（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Sachiko Shimoji
２．発表標題 Transitivity and Morphological Voice in Japanese and Chinese from the Perspective of Cognitive 'Viewpoints'
３．学会等名 the 32nd North American Conference on Chinese Linguistics(NACCL-32)（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 下地早智子	４．発行年 2024年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 584
３．書名 日中対照言語学研究論文集 第2巻：中国語から見た日本語の特徴、日本語から見た中国語の特徴	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関